

I 調査概要

1 調査の目的

「かわさき市民アンケート」は、昭和50年度から毎年1回1,500人を対象として行っていた「市民意識実態調査」を、より多くのテーマ、より多くの対象に調査するため、調査回数を年2回、各回3,000人の市民を対象にした調査に拡充し、名称を変更して平成18年度から実施することとしたものです。

昭和50年度から継続的に行ってきた市民の定住状況、生活環境の評価、市政に対する評価と要望等に加えて、市民生活に関するいくつかのテーマなどについて、市民の生活意識や行政に対する意識を調査し、市政運営や政策立案の参考資料とすることを目的として実施しました。

2 調査の方法

- (1) 調査の地域 川崎市全域
- (2) 調査の対象者 川崎市在住の満20歳以上の男女個人
- (3) 標本の抽出 住民基本台帳からの層化二段無作為抽出
- (4) 標本数 第1回 3,000標本（平成26年 7月抽出）
第2回 3,000標本（平成26年10月抽出）
- (5) 調査方法 郵送法（郵便配布－郵送回収・はがき督促を1回）
- (6) 調査期間 第1回 平成26年 7月17日（木）～平成26年 8月 8日（金）
第2回 平成26年10月30日（木）～平成26年11月21日（金）
- (7) 調査委託機関 株式会社エスピー研

3 調査項目

◎ 第1回

＜調査テーマ＞	＜問番号＞
(1) 川崎市総合計画について	(問 1～問 7)
(2) 選挙について	(問 8～問15-1)
(3) 区民会議について	(問16～問19-2)
(4) 大気環境データの提供について	(問20～問24)

◎ 第2回

＜調査テーマ＞	＜問番号＞
(1) 定住状況について	(問 1～問 2-2)
(2) 生活環境の評価について	(問 3～問 4)
(3) 関心ごとと行動範囲について	(問 5～問 6)
(4) 市政に対する評価と要望について	(問 7～問 9)
(5) 市政情報について	(問10～問13)
(6) がん検診について	(問14～問17)
(7) 市民の防災意識について	(問18～問21)

4 回収状況

	第1回	第2回
(1) 標 本 数	3,000標本	3,000標本
(2) 有効回収数	1,219 人	1,345 人
(3) 有効回収率	40.6 %	44.8 %

5 報告書の見方

- (1) 集計は、小数点第2位を四捨五入しています。そのため、数値の合計が100.0%にならない場合があります。
- (2) 基数となるべき実数（ n ）は、設問に対する回答者数です。
- (3) 回答の比率（%）は、その質問の回答者数を基数として算出しています。そのため、複数回答の設問は全ての比率を合計すると100.0%を超えることがあります。
- (4) 本文や図表中の選択肢表記は、場合によっては語句を短縮・簡略化しています。
- (5) 回答数が30未満と小さいものについては、比率が動きやすく分析には適さないため、参考として示すにとどめます。

6 標本誤差

標本誤差は次式で得られ、①比率算出の基数（ n ）、②回答の比率（ p ）によって誤差幅が異なります。

$$\text{標本誤差} = \pm 2 \sqrt{2 \times \frac{N-n}{N-1} \times \frac{p(1-p)}{n}} \quad \left\{ \begin{array}{l} N = \text{母集団数 (川崎市の20歳以上人口)} \\ n = \text{比率算出の基数 (回答者数)} \\ p = \text{回答の比率 (\%)} \end{array} \right.$$

今回の調査結果の標本誤差は下記ようになります。

回答比率(P) 基数 (n)	10%または 90%前後	20%または 80%前後	30%または 70%前後	40%または 60%前後	50%前後
1,400 人	±2.27%	±3.02%	±3.46%	±3.70%	±3.78%
1,345	±2.31%	±3.08%	±3.53%	±3.78%	±3.86%
1,219	±2.43%	±3.24%	±3.71%	±3.97%	±4.05%
1,000	±2.68%	±3.58%	±4.10%	±4.38%	±4.47%
700	±3.21%	±4.28%	±4.90%	±5.24%	±5.35%
500	±3.79%	±5.06%	±5.80%	±6.20%	±6.32%
300	±4.90%	±6.53%	±7.48%	±8.00%	±8.16%

※上表は $\frac{N-n}{N-1} \div 1$ として算出しています。なお、この表の計算式の信頼度は95%です。

注／この表の見方

標本誤差とは、今回のように全体（母集団）の中から一部を抽出して行う標本調査では、全体を対象に行った調査と比べ、調査結果に差が生じることがあり、その誤差のことをいいます。この誤差は、標本の抽出方法や標本数によって異なりますが、その誤差を数学的に計算することが可能です。その計算式を今回の調査に当てはめて算出したのが、上記の表です。見方としては、例えば、「ある設問の回答者数が1,400人であり、その設問中の選択肢の回答比率が60%であった場合、その回答比率の誤差の範囲は最高でも±3.70%以内（56.30～63.70%）である」とみることができます。